

重要文化財【桑野遺跡出土品】春季特別展示解説

— 白色材例を中心として —

あわら市郷土歴史資料館
特別展示室

平成 24 年 9 月 6 日、[重要文化財／考古資料] に指定された「福井県桑野遺跡出土品」は、桑野遺跡から出土した縄文時代早期末から前期前葉を主とする出土品一括です。

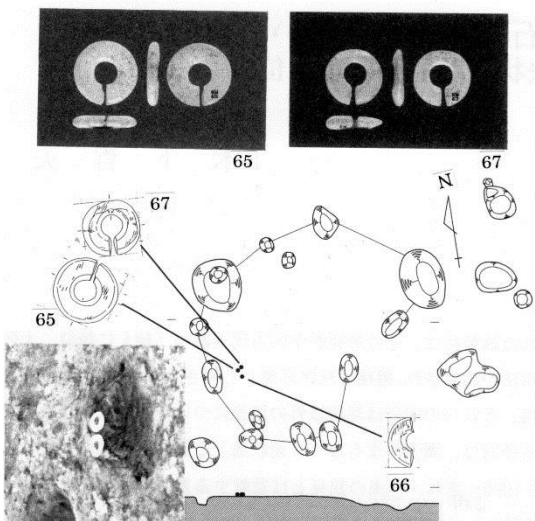
指定品は、玦状耳飾などの石製装身具を主体とする石器・石製品、合計 85 点から構成（他に附として水晶原石 1 点が加わる）されています。出土品の多くは原位置に近い状態で出土、特に玦状耳飾は素材・製作技法などを対で揃えた事例が多くみられます。それらは縄文時代の人々の装身や葬送儀礼を復元する上で重要であり、わが国を代表する出土品であるとともに、環日本海域に於ける縄文文化の特質と交流を解明する資料として、その学術的価値は極めて高いものと評価されました。

抑々、玦状耳飾は渡来系石器の一つとして予てより注意されてきた資料です。取分け、白色で優美な石材を用いた品や篋状石製品は、大陸との交流を云々されたりもします。この度の《春季特別展示》は、そういった指定品を抽出しました。この展示から、遙か過去に営まれた私達祖先が暮らした日々的一端に、思いを巡らせて戴ければ幸いです。

《赤 手前》

23 号遺構（第 1 図）：周回ピット(9 穴径 248 cm)が区画する平面の南西部側、開口部からは奥まった位置に玦状完品 1 対、その内側に玦状欠品 1 が近接し検出された。

対品の切目部方位は相向かい合い、両者



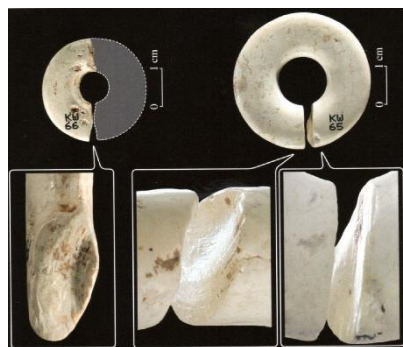
第 1 図 23 号遺構

には大小がある。また切目作出法は糸鋸法が用いられ（第 2 図）、写真にあるような

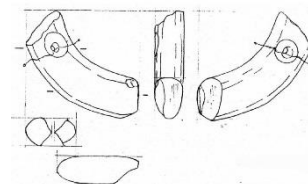
下方への端部切断が行なわれたとする所見が示されている。

12 号土壇：楕

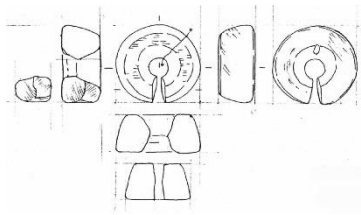
円形土壇(82 cm×70 cm)の中央から（第 3 図）の品が単独で出土した。切目端部の一方のみが残存した欠品であるが、（第 2 図）撮影資料と同様に切目部内面端に切離しの名残を看取できる。



第 2 図 『玉器起源探索』より



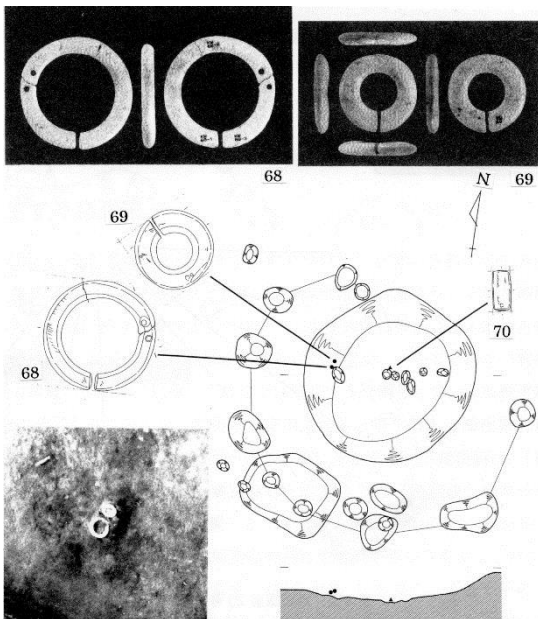
第 3 図 12 号出土品



(第4図)
の品は、腰
高の柱状塊
様と目され
る品で桑野

第4図 柱状塊様品 出土品では稀少
である。

24号土壙(第5図):不整形土壙(206 cm × 204 cm)の西側肩部下端付近に塊状完品1対が近接し、中央部底面最深部から管玉1が検出された。対品の切目部方位は相反し、両者の形状には大小がある。小形品の切目作出法も、23号対品と同様に糸鋸法が採用されたと思われるものの、切断方向は中央孔から外側へ向かうとの分析は、ロシア・沿海州チョルトヴィ・ボロタ例と同法に看做された。予々、塊状耳飾と管玉の埋納は、栃木・根古屋台例などから分離されるのでは、と想定されもしたが、両者共伴の新例として注意される。



第5図 24号土壙

< 出展品 >

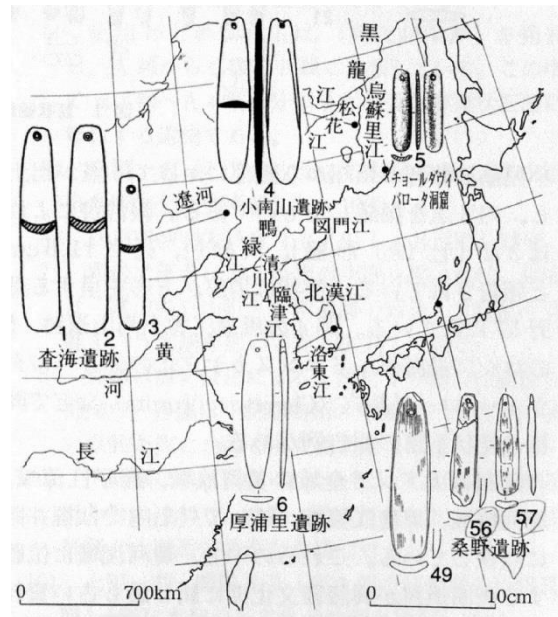
- ・23号 塊状耳飾3 [白色材対完品2
白色材欠品1]
- ・24号 塊状耳飾2 [白色材対完品2]
管玉1 [白色材]
- ・12号 塊状耳飾1 [白色材欠品]
- ・包含層 塊状耳飾1 [白色材]

《 紺 中央 》

20号土壙(第7図):長楕円大形土壙(324 cm × 148 cm)の南東隅に塊状完品2対を検出、そこから約15 cm北東の位置にも塊状完品2、篋状品2、管玉1が一括出土した。

桑野出土篋状品には大小の二態があり20号の資料はともに小品である。平面形は、「縄文の玉斧」と称せられた品に類似するも、横断面が緩やかなU字状に窪む特異な形状(第6図)を呈する点で相異して、従来列島には類例が知られていない。

素材の異なる類品との比較、大陸の関連資料、将又用途など諸説ある資料である。



第6図 東アジア篋状品(大賀2004)

管玉の断面は方形で、端部を刻み、側面には刺突紋を持つ。佐賀県・東名貝塚の骨製品に鋸歯紋の例があるものの、帰属時期は齟齬する。

玦・篔・管玉の組合せもまた大陸との関係を云々される。

2対のうち、西方の白色材対品は近接・並置され、切目部方位は相反しながらも両者土壌内を指す。東方の滑石材対品は半ば重複し、切目部方位は略同一であろうか。

対品相互には稍間隔がある。

《 出 展 品 》

・ 20 号 玦状耳飾 5

[白色材対完品 2]

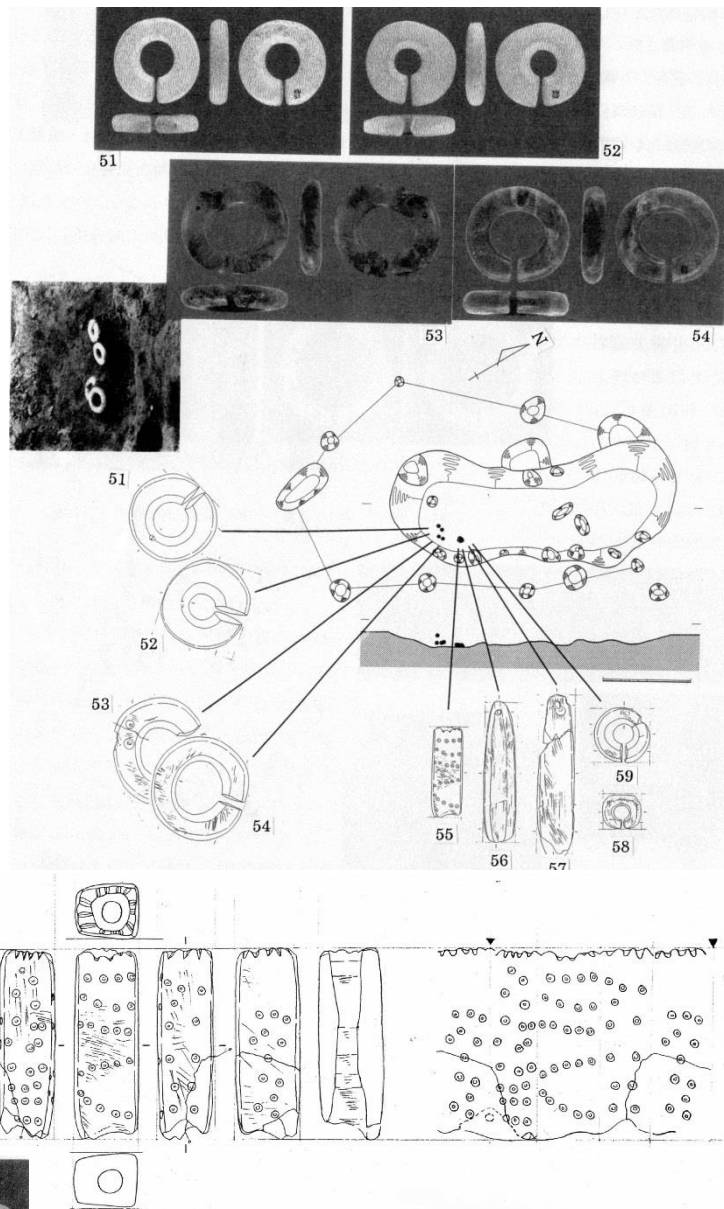
[滑石材対完品 1・

展開写真 1]

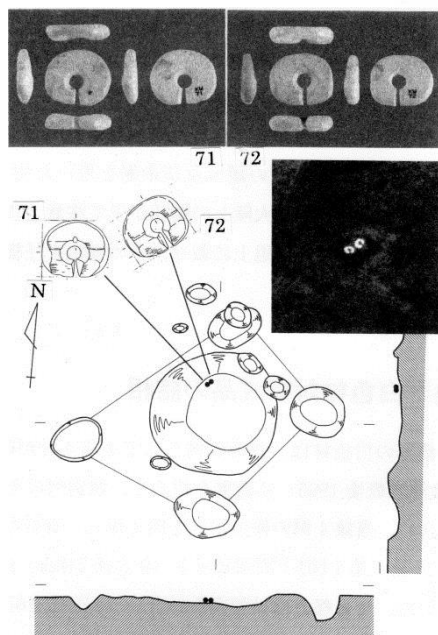
[白色材 1・滑石材 1]

篔状垂飾 2

管 玉 1 [滑石材]



第 7 図 20 号土壌及び出土管玉紋様



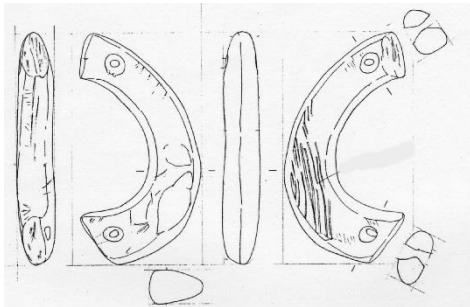
第 8 図 25 号土壌

《 緑 奥 》

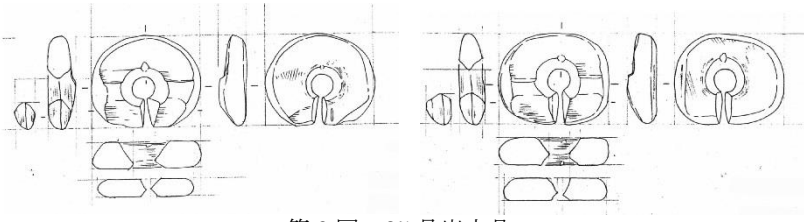
25 号土壌 (第 8 図) : 不整円形土壌(120 cm × 116 cm)の北西隅に玦状完品 1 対が近接し並置されていた。切目部方位は対品とも等しく土壌内側を指し、僅かながら相互に外反する。中央孔は小さく、他の白色材品とは平面形が異形で、「未成品」埋納例やもしれない。然り乍ら、その態様について「割付線のついた玦状耳飾」と理解されたり、「横位分割技法」により製作された痕跡と観察されるなど、その解釈は分かれている。

10号土壙：長楕円形土壙の肩部には塊状欠品、また、中央からは腕輪状とも目される品(第10図)が出土した。

品の両端には穿孔があり、破面が研き込まれていることに鑑み、「瑣状石製品」と目されたりもする。白色材ではなく滑石が用いられているのにも留意すべきではあるが。



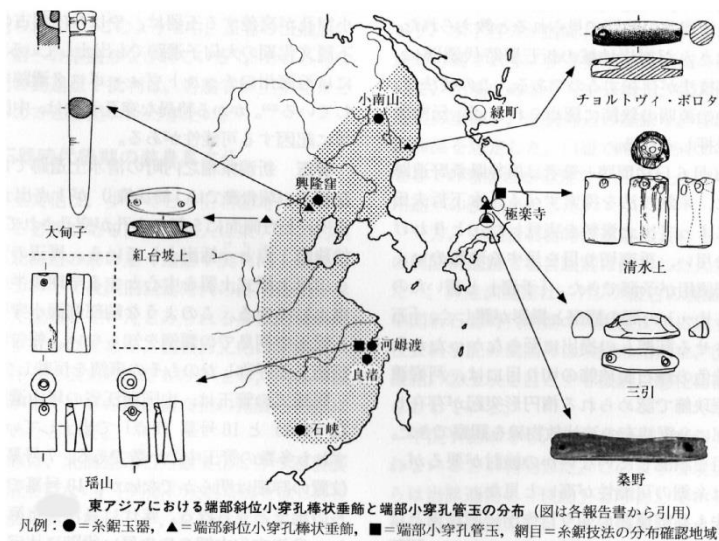
第10図 10号出土品



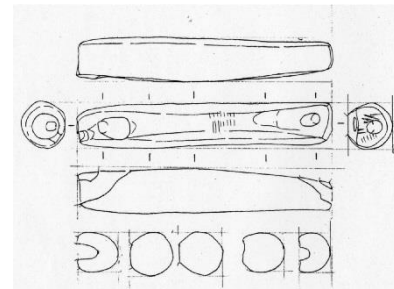
第9図 25号出土品

19号土壙：楕円形二段掘り込みの小土壙上段底面から棒状の品(第12図)が単独出土した。その周囲には5穴のピットが巡り、連結した土壙の存在も想定されよう。

品の両端には、側面から斜位の穿孔を有し、「端部斜位小穿孔棒状垂飾品」と仮称された。この穿孔手法は、中国東北地域に起因する可能性を指摘される。然り乍ら、この品も(第10図)の品同様、滑石材が用いられている。また、石製装身具集中出土区以外からも、形状の異なる白色材塊状品端部片が若干存する。



第11図 端部小穿孔例分布(藤田2004)



第12図 19号出土品

< 出展品 >

- ・25号 塊状耳飾2
[白色材対完品2]
- ・10号 塊状耳飾1
腕輪状垂飾1
- ・19号 棒状垂飾1
- ・包含層 塊状耳飾2 [白色材]

展示期間 : 平成27年3月14日(土曜) ~ 6月7日(日曜)
 開館時間 : 9:30~18:00(最終入館は17:30まで)
 休館日 : 毎週月曜日、第4木曜日(その日が祝日の場合はその翌日)
 お問い合わせ : TEL; 0776-73-5158 e-mail maibun@sity.awara.lg.jp